明治の暗黒

暗殺

佐賀潜

●明治の暗黒

暗殺

佐賀潜

講談社

暗殺〈明治の暗黒〉

© 1965
SEN SAGA

佐賀潜

四五〇円

第一刷　昭和四十年十一月十日

発行者　野間省一

印刷所　信毎書籍印刷（株）
長野市西和田四七〇

製本所　（有）大光堂
東京都文京区西青柳町三

発行所　（株）講談社
東京都文京区音羽三ノ十九
電話・東京九四二〇一一一一
振替　東京　三九三〇

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

目次

第一章　明治四年一月九日　5
第二章　弾正台史生千馬武　23
第三章　中警視安藤則命の眼　41
第四章　権妻福井かねと事件　58
第五章　暗黒への進展と影の人　79
第六章　監倉の女と権少警部　97
第七章　白刃と短銃と捜査　121
第八章　捜査の奸計と拷問　143
第九章　暗殺者の影を追うもの　162
第十章　不義の自白の虚実　175
第十一章　少検事千馬武の口供書　195
第十二章　明治八年七月十四日　217

装幀　森下年昭

装幀写真　浜田　啓

さしえ　山崎百々雄

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

暗殺

明治の暗黒

第一章　明治四年一月九日

夜明けまでは、一刻（二時間）ほどのあいだがあった。

強い寒風が、真っ黒いしげみを、はげしくゆさぶり、けものの咆哮（ほうこう）に似た叫びをあげている。高さ六尺あまりの土塀が、えんえんとつづき、その上の古木の繁みが、無気味な闇をつくっていた。土塀の前が、五間幅の道路であることは、反対側の道端に、溝が流れているので判る。

道路の暗がりに、地の底から湧き出たように、黒い人影が現われた。人影は、土塀にぴったりと吸いつき、呼吸をしずめているようすだった。

黒い影の、両手がのびた。

足の爪先ではね上ると、両手の先が、土塀の上の瓦屋根をつかんだ。黒い影は、浮き上り、身軽に土塀を越えた。

ばさり――と音がした。

黒い影は、枯れた熊笹の中で、しばらくしゃがみこみ、

息を殺していた。風が、繁みを鳴らし、枯れ笹をさわがせる。暗い夜空に、離れ家風の構えが、ぼんやりと見え、孟宗竹の垂れた葉先が、羽目板を叩きつけていた。

影の人は、羽目板へ、からだを擦りよせると、ランプを灯した。灯芯が、地虫の鳴き声に似た音を立て、焔が大きくなった。ホヤの上に、すす除けの傘があり、手提げ用の把手がついているランプだった。

影の人は、ランプをかかげた。窓があった。ほてい竹の桟を打ちつけてある、三尺四角の窓だが、真ん中の三本の桟がはずれ、斜めにかしいでいた。

影の人の姿が、ランプの灯りに、映し出された。羽織袴の、中肉中背の男で、袴のもも立ちを取り、頭からすっぽりと、黒い布をかぶり、太い眉毛の大きな眼が、鋭く光った。

男は、はいていた草履をぬぐと、足袋裸足となり、窓の桟のはずれから、中へ忍びこんだ。そこは、厠の前だった。男は、ランプを廊下に置くと、小刀を抜いた。冷たい銀光が、灯明りにきらめいた。

男の髪の形は、判らないが、黒い布の端から、はみ出た髪から想像すると、その頃、はやり出した、ジャンギリ髪らしかった。身ごしらいに隙がなく、両足に黒い脛当てをしていた。

男は、ランプを手に持つと、廊下を、音も立てず、歩みすすんだ。一間幅の廊下は、真新しい木の色をみせ、京風の壁もどっしりと落つき、柱も襖も障子も、大名屋敷のような重さが見える。

廊下は、右へ曲っていた。

右側の障子のかげから、鼾が聞えてくる。嵐のような、ごうごうたる鼾だった。男は、廊下へランプを置くと、指先で、障子に穴をあけ、中をのぞいた。息を吸いこみ、腰をかがめると、男は、しずかに障子をあけた。

布団が二組、敷いてあり、赤い花模様の掛布団をかぶり、男と女が眠っていた。男は、いくらか布団をずらし、胸毛をみせ、大の字に仰臥していた。四角い、色黒の、顔の大きな四十男だった。

その左隣に、寝ている女は、髷を結った二十前の若い女で、男に背を向け、半顔をふとんに埋め、かすかな寝息を立てている。

覆面の男は、寝ている男に、にじり寄った。鼾が静まった。男は、姿勢を低くすると、ほんのわずかな間、うずくまった。鼾が、ふたたび高くなった。

男は、布団に近づいた。小刀がきらめいた時、男は、布団の上に馬乗りになって、寝ている男の、喉をめがけ、刀を突き刺した。

呻めきが上り、布団がはねのけられ、寝ている男が、立ち上ろうとした。覆面の男は、なんども、斬り下した。血しぶきがとんだ。布団の中の男は、間もなく動かなくなった。

女が、悲鳴をあげた。

男は、抜き身の刀を、女の頬にあてがい、

「騒ぐな、静かにせい」と、太い声をあびせた。女は、わなないながら、布団をかぶった。

男は、足早に廊下へ出ると、ランプを掴み、厠の前の窓から、外へとび出した。ランプを吹き消すと、入ったときと同じように、暗がりに、姿を没してしまった。

風は、ますますはげしくなっていた。土塀の中の樹の繁みが、倒れるほど、風にたわみ、荒れ狂う寒風に、あらがっている。

東の空が、いくらか白みかかり、車の轍の跡が残る、凍てついた赤土道が、ぼんやりと見え出した。

弾正台史生千馬武は、官員宿舎の一室で、雨戸を叩く、風の音に眼をさました。風は、狂ったように襲いかかり、女の悲鳴に似た音を引いて、走りぬける。

千馬は、掛布団に顎をうずめ、暗がりの中に眼をさらし、風音に聞き耳を立てた。風は、一定の間隔を置いて、狂暴をくり返しているようだった。

遠い海鳴りに似た、風のうめきが、次第に近づき、宿舎をはげしくゆさぶると、天空はるかに舞い逃げ、ふたたびうめきをともない、押し寄せてくる。

半刻ほどすると、夜が明けた。

雨戸の隙間から、薄陽が、障子に射しこみ、六畳一間の部屋の中が、ぼんやりと明るくなってきた。

寝不足のため、頭の芯が重い。千馬は、もう少し眠ろうと思い、眼をつむった。その時、掘割に面した入口のあたりで、あわただしく、門扉をたたく音がした。早朝のため、門番が眼ざめず、門扉の前で、大声でわめく声が聞えてきた。

千馬は、布団からとび起ると、窓を開けた。風は、いくらか納ったようだが、宿舎と弾正台の間の中庭の樹木が、枝をたわませ、梢を風に鳴らしていた。榊の大木の枝の隙間から、太い門の角柱がみえる。

「大変なんだ。広沢参議が、殺されたんだ。おねがいです」

男のわめく声が、朝の大気をつんざいた。千馬は、すばやく、寝巻を着換えると、階段を踏み鳴らしながら、下へ駈け下りた。

〈大事件だ〉

からだ中が震えてくる緊張感が、千馬の走る足を、もつれさせた。千馬は、門扉に駈けよると、太いかんぬきをはずした。ジャンギリ頭の三十男が、まろびこんだ。門番や使部が、物音にめざめ、眠たげな眼をしばたきながら寄ってきた。

千馬は、男を、受付控え室へ連行した。

「名前は……」

千馬は、男を、畳敷の上りかまちに腰かけさせると、問いかけた。男は、大きく息を吐いた。飛白の着物と羽織に、袴をはき、ジャンギリの頭髪を、まん中から分けた、色白の役者のような男だった。

「起田正一と申します。富士見町の、広沢参議邸の家令を

しとります」
起田と名のる男は、富士見町から、走りつづけてきたらしく、それだけいうのに、三度も呼吸をととのえた。
「で、参議が……」
「今暁、自邸で、何者かに斬殺されました。一刻ほど、前のことです」
「ええッ。広沢参議が……で、おいのちはどうした」
千馬は、喉を詰らせた。
「ご落命、なされました」
「犯人は？」
「何奴とも知れません」
「よし、直ぐ、参上します」
千馬は、そういいながら、起田正一の上申の顚末を、白紙に毛筆でしたためた。起田が、「よろしく、たのみます」といって、帰っていくと、千馬は、使部を走らせ、弾正台の長官九条道孝と、大弼池田茂政、大忠渡辺昇の邸宅へ、事件発生を知らせた。
千馬は、庁内の史生事務室へ入ると、自分の机の前に坐り、眼をつむった。十二畳敷の部屋の中に、六つの机がならび、硯箱と紙が重ねてあるだけで、誰もいない。
朝日が、障子に樹の影を映し、小枝をゆさぶっているが、風の力は幾分弱まっていた。千馬は、広沢参議の面影を、まぶたの裏にえがいた。六尺有余の大男で、二重瞼の大きな眼は、みつめられただけで、身震いするほどだった。
広沢は、明治新政府部内でも、その実力は、群を抜いていた。王政復古が実現してから、天皇親政を徹底するため、太政官制が設けられ、左大臣、右大臣の下に、大納言を置き、その下に四人の参議が居た。
参議の下に、民部、大蔵、兵部、刑部、宮内、外務の各省大臣がいたのだから、参議が、どんなに顕職であったか、うかがい知ることができる。
参議制は、明治二年七月に制定され、副島種臣、前原一誠、大久保利通、広沢真臣の四人が、参議に任ぜられた。
千馬武は、一度だけ、広沢参議と会ったことがあった。一年前の正月のことである。
兵部大輔前原一誠を、太政官出仕の中弁江藤新平に紹介してもらい、兵部省の大輔室で会った際、たまたま、広沢参議が、来合せていたからである。
「おんし、紹介しておこう。この男は、千馬武といって、江藤中弁の知合いのもんじゃ。親父どんが、大阪西町奉行の同心をしとったんじゃ。ご時世が、変ったんで、東京へ、江藤を頼って、出てきたちゅうわけだ。おんし、なんぞ良い知恵はないか」
前原が、そういって、広沢にたのんだ。
「そうか。弾正台へ推選したら良かろう。世が世なら、同心は、世襲じゃから、大阪の同心になっとるわけじゃな」
広沢は、太い声でいうと、千馬をみつめた。四角い大きな顔の、部厚い唇のあたりに、微笑をふくんでいるが、底光りする眼光に、千馬は、背筋の寒くなる思いがした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たった一度、このとき広沢参議に会っただけだったが、千馬は、その人物の大きさに、圧倒されるような感じを持った。

が、千馬武は、広沢の一言で、弾正台の史生として出仕することができたのである。若い千馬に取って、広沢は、いわゆる雲の上の人のように、遠い存在だったが、このことがあってから、親近感を抱いていた。

千馬武は、このとき二十三歳の若年だった。千馬家の先祖は、浅野内匠頭長矩に仕えた、馬廻り役千馬三郎兵衛光忠である。光忠は、赤穂浪士の一員として、元禄十四年、吉良上野介の首級をあげ、本懐を遂げたのち、切腹した。その子、千馬藤之丞は、備前岡山の池田侯に仕えた。その支族が、大阪に出て、奉行所の同心となり、千馬武の父、雄平までつづいている。

千馬が頼ってきた江藤新平は、後に司法卿となり、やがて、郷里の佐賀へ帰り、明治七年にいたって、佐賀の乱を起した俊傑だが、千馬の父雄平と、良く見知っていたので、その子の上京と出仕について、何かと世話をやいたのである。

千馬武が出仕している弾正台というのは、一種の高等裁判所のようなもので、明治二年五月に設置された。その職分は、上は大臣から、下は判任の官員にいたるまでの人々の、非違をただすのを目的とする官庁である。明治初年の、役人たちの私行を監視し、東京府下を巡察していた。

この頃の話だが、大隈重信が、縞のフランネル生地で、筒袖の上衣（現在の背広）を作り、袴の膝から下を、たっつけのようにすぼめ、和洋折衷の服装を着て、得意になっていた。これを知った弾正台は、大隈を召喚し、叱責したことがある。

また、高知県土佐の藩侯、山内容堂が、隅田川に船を浮べ、蘇東坡の赤壁の遊びをやった際、弾正台へ願い出て、「大目にみてもらいたい」と頼んだことがあった。

つまり、風俗のみだれを監視する役目もあったので、弾正台の役人たちは、保守的な傾向を持っていたようである。

例えば、明治二年九月四日、兵部大輔大村益二郎が、京都三条木屋町の旅館で、兇漢の襲撃をうけ、その傷がもとで、二ヵ月後に死亡した事件が発生した。

犯人たちは、大村のフランス式兵制採用に反対し、国民皆兵は、士族をないがしろにするものだ――と憤激し、大村を襲ったのである。この犯人の処刑に対し、弾正台はこぞって反対し、助命運動をしたことがある。

つまり、当時の思想風潮からいうと、こちこちの固ぶつたちが、弾正台の主要な地位についていた。

この頃の一般警察は、東京府に属し、府兵という軍隊が、警察権を握っていた。が、広沢事件は、被害者が、政府の高官であったので、弾正台が、その取調べの任に当るのである。

千馬が、机の前で腕を組み、広沢の面影を頭の中で追っていると、巡察属の大井安親が、史生室へ入ってきた。

細長い、渋紙のように色黒の、大井の顔をみつけると、千馬は席を立ち、いんぎんに頭を下げた。
「今朝は、ご苦労じゃったな。渡辺大忠とわしと、あんたと三人で、参議邸へ調べにいくことにきまった」
大井が、口元をゆがめながら、しゃがれた声でいった。
「はっ。私も……」
千馬は、途中で言葉を飲みこむと、大井の顔を、まじまじとみつめた。大井は、すでに弾正台の制服である羽織を着て、袴のもも立ちを取っている。
「そうじゃ。大忠殿も、千馬がいい——と仰せられたでな」
「よろしく、ご指導を……」
千馬の声は、かすれ、唇を噛んだ。——参議の暗殺事件に、史生として出馬する——ことが、どんなに大役であるか、千馬は、痛いほどわかっていた。
大井安親は、巡察属だが、通称は巡察弾正と呼ばれ、十人の同僚と交替で、東京府内を巡察するのを、職分としていた。
弾正台の長官は、弾正台尹と呼び、当時の官制からいえば、勅任官で従四位であった。次官と目される大弼は、従四位下の、やはり勅任官で、その下に、奏任官の大忠が一人と、少忠が二人いた。
巡察弾正の大井は、正七位であったから、判任官の史生の、一番下位に属する千馬からみれば、現在の判事と、書記の関係にあったのだ。
大井は、このとき四十一歳で、巡察弾正の古参株の地位にいた。
千馬は、この大井を、なんとなく好かなかった。態度が尊大であるばかりでなく、いつも、自説を押し通す強引さが、胸につかえていた。
「千馬君、この仕事は大役だよ。太政官内部は、ひっくり返るほどの大騒ぎを演じている模様だ。犯人が、何者か判らんが、早晩つかまるだろう。参議は、世に聞えた偉丈夫で、剣の腕も立つ。それを仕止めるほどの男の顔が見たいもんだ」
「で、犯人の目当てでも、あるんですか」
「いや、ない。が、大方の見当はつく」
「と、いうと……」
大井の顔が、急に引締ってきた。口を結び、くぼんだ眼を、ぎらぎら光らせると、くるりと向きを替えて部屋を出ていった。
千馬は、その後ろ姿を、眼で追うと、〈犯人は、いったい誰なんだろう〉と考えた。

二

弾正台大忠渡辺昇と、巡察弾正大井安親、史生千馬武、医師福井順三の一行が、馬をとばし、弾正台の正門を出たのは、朝の六つ半刻（午前七時）を廻った頃だった。
四人共、赤丸の中に弾の字を、背中に染め抜いた割羽織

を、強い朝風になびかせ、神田橋、一つ橋を右手に見て、疾駆した。

時々、千馬の馬が、渡辺大忠とならぶ。

「千馬史生、国家の一大事じゃ。活眼をひらいて、兇変の現場を、見届けるんだ。この事件は、三条公より、天聴に達せられたぞ。身に余る大役かもしれん」

渡辺の太い声が風の中を走る。千馬は、何かいおうとした。「政治向きの、あつれき……」と、いいかけて、声をのんだ。

千馬は、参議の横死について、なんの予備知識も持っていなかった。ただ、先刻、史生室で、大井が、「犯人の大方の見当はつく」といった言葉から、「もしや」という疑惑を持ったのだ。が、それは、口に出していうべき事柄ではなかった。

皇城の森は、冷たい陽ざしに、明るく染まり、大気の中に静まりかえっていた。

渡辺が、馬に鞭をくれた。馬は、一声高くいななくと、またたく間に、千馬を引きはなしていった。

渡辺昇は、このとき四十四歳、弾正台が設置されると、大忠に任ぜられた。大忠とは、局長、或いは刑事部長のような地位で、弾正台における実権を握っていた人物である。

肥前大村藩士で、若くして江戸に出て、安井息軒の門に入り、漢籍を修め、また、剣客斎藤弥九郎の道場に入り、剣道を学んだ。斎藤道場に居た頃、桂小五郎（後の木戸孝允）も同門で、深い交わりを結んだ。

維新多事の際は、土佐の坂本竜馬と共に、薩長連合に、大いに働いた。明治元年、木戸孝允の推選によって、諸郡取調掛となり、次いで、権弁事、刑法官権判事、侍詔院主事を経て、弾正台大忠となったのである。

その後、盛岡知事、大阪府知事、元老院議官などを歴任し、会計検査院長を、十五年間も勤め、子爵を賜わり、大正二年十一月九日、七十六歳で死去している。

渡辺は馬の手綱をしめ、九段坂の下で、ひと息入れると、うしろを振り返った。千馬は、やっと追いつくと、馬上の髭面に、軽く頭を下げた。

「君の馬上姿を見ると、まるでお稚子姿じゃ。若いということは、ええもんじゃが、事件は、我々にとって戦場もおんなじだ。しっかり走れ」

渡辺は、そういうと、一気に九段坂を駈けのぼった。千馬は、手綱を締め、あぶみを蹴ると、後を追った。

千馬にとって、渡辺大忠は、最も好感の持てる上司だった。まちがいを仕出かすと、落雷のようなすさまじさで、怒鳴るが、いささかも、悪意が感じられなかった。

弾正台の中でも、府中の庶民の間でも、「髭の大忠」と仇名されるくらい、見事な髭を鼻下にたくわえ、襟首の下から脛まで、黒々と毛が生えていた。

渡辺は、後年、累進し、元老院議官となった夏、参内して明治天皇に拝謁を賜ったことがある。猛暑のことで、無類の暑がりやの彼は、ワイシャツを着ず、素肌に、チョッ

キ、上衣という姿で、御前にまかり出た。
胸毛が深いため、遠目でみると、黒いシャツを着ているように見えた。拝謁を終えて、渡辺が退出すると、天皇は、侍臣をかえりみながら、
「渡辺の着ていた黒シャツは、何でつくったものじゃ」
と、仰せられた。
「胸毛が、シャツに見えたのです」
侍臣が答えると、天皇は、「私も胸毛が欲しいものじゃ。さぞかし、涼しいであろう」と、いわれた話が残っている。
渡辺は、豪傑肌の人物で、部下たちは、こぞって親しみを持っていた。千馬は、下僚官員の史生だったので、めったに、渡辺大忠から、言葉をかけられることもなかったが、もの判りのいい叔父か、頑固の中に慈味あふるる父親のような、親近感を抱いていたのである。
一行は、坂を上ると、皇城の田安門を左手にみて、道を右へ曲った。曲りくねったこの道を、下れば牛込橋に出る。橋の手前の左側の一角が、参議の邸宅であった。
京風の油土塀が、えんえんとつづき、その上から、椎の古木が、濃緑の葉を重ね、陽光をさえぎっていた。東面した角に、古びた樫造りの門があり、観音びらきに開けられた門前に、十数人の府兵が、立番をしている。
いずれも銃をささえ、つつ袖の上衣に股引、草鞋(わらじ)ばきで、中には、刀をさしている者もあった。大井が、立ちはだかる府兵に、大声で怒鳴った。
「弾正台、渡辺大忠さま、お取調べのため、まかり越したぞ」
府兵は、一斉に道をひらき、それぞれ、挙手の礼をした。
門内に入ると、玄関口、馬車寄せの前に、槇の大木が高くそびえ、その梢に冬陽が当っていた。
家令の起田が、左手の内垣の門から走ってきた。
「参議の御遺骸は、こちらです。私は、家令の起田正一と申します」
起田は、渡辺に頭を下げると、震え声でいった。大井が、渋面をつくり、大声で声をかけた。
「ご遺体を、そちらへ移したのか」
「ちがいます。兇変のまま……」
起田の言葉が、途切れた。そのとき、十数人の、使用人、女中たちが、出てきて、一斉に頭を垂れた。
「判ったぞ。先ず、現場からじゃ」
渡辺は、そういうと、馬から下りた。千馬も大井も、医師もこれにならい下馬した。仲間者らしい男たちが、寄ってきて、それぞれの轡(くつわ)を取り、馬をつないだ。
千馬は、渡辺、大井に従い、内垣の門をくぐった。鞍馬の大きな飛石がならび、刈りこんだつつじの群生が、陽のとどかぬ薄暗がりに、枝を交え、足元の熊笹は、枯れ色をみせていた。
生い繁った孟宗竹の林があった。その陰に、瓦を葺(ふ)いた平家建が見えた。起田が前へ進み出ると、玄関の格子戸(こうしど)を

開けた。家の中から、線香の匂いが流れ、千馬の鼻を衝いた。

渡辺と大井が、紐で結んだ草履を脱ぐのを眺めてから、千馬は医師と共に、中へ入った。八畳の玄関広間に、猛虎を画いた、衝立があった。咆えかかる虎の絵を眺め、千馬は、ふと、生前の広沢参議の顔を、思い出した。

衝立の斜めうしろに、丸髷を結った、若い女が、三つ指をついて、畳に額がつくほど、頭を下げていた。

「お屋敷に、ご奉公にあがってます、福井かねでございます」

女が、声をふるわせた。

「あんたが、お部屋さんですな。弾正台の渡辺です」

渡辺は、らいらくな調子で声をかけたが、いつも庁内で使う言葉とちがった、いんぎんさがあった。

〈この女が、権妻だったのか〉

千馬は、そう思うと、顔を上げた女の顔をのぞいた。権妻とは、妾のことである。江戸時代から、「妾奉公」という言葉がある。富豪や顕官になると、昔の大名が、腰元と称する女を、側近く召し抱え、気に入れば、手をつけるしきたりがあった。

明治になっても、この風習は、後を断たなかったばかりでなく、新政府の要人大官は、自邸に、権妻を置き、はばかることがなかった。一種の見栄もあったし、大臣級の人物が、おしのびで、芸妓娼婦を買いに出かけるわけにもいかなかったので、「奉公」という名目で、自邸に住まわせておいたのである。

渡辺が、かねに、「お部屋さん」といったのは、権妻は、おおむね離れ屋敷や、別棟の屋敷に、公然と住んでいたので、そんな呼称が生れていたからだ。

つまり、権妻を抱えると、必ずといっていいくらい、離れを新造し、そこを居宅とする風習があったので、「ご新造」とか、「お部屋さま」とかいう、呼称が出来たようである。

かねが、一行をみちびくため、立ち上り、軽く会釈をすると、右手で、裾をひいた着物の褄を取り、一間幅の廊下を、うちまたで歩き出した。

〈きれいなひとだ〉

千馬は、息を殺しながら、かねの横顔を睨んだ。輝やくばかりに色白で、形のいい鼻は、高からず低からず、紅を塗った口元は、人形のようだった。水をたたえたような、二重瞼の眼が、大きすぎるくらいに思えたが、その眼と視線が会ったとき、千馬は、息苦しい身ぶるいを感じたほどだった。

上体を、やや前にかがめ、かねが静かに進んでいった。次の間の前を過ぎ、源氏襖のはまっている前まできたとき、かねは、磨かれた廊下に坐り、作法通り、襖を開けた。そのとき、千馬は、かねの右頬の上部に、耳に向って、一寸五分くらいの切創があるのに気がついた。

〈兇漢が、参議をおそったとき、このひとは、参議をかばい、切創をうけたのだろう〉

千馬は、そんなことを考え、福井かねのけなげなふるまいを思い、胸の中が熱くなる感動をおぼえた。
一行は、座敷へ踏みこんだ。
広い床の間のある、十畳の座敷だった。まん中に、幅広い布団が敷かれ、掛布団を盛りあがらせ、参議の死体が、仰臥させてあった。
渡辺が、死体のそばへ歩み寄り、両手を合わせ、瞑目した。大井も千馬も、医師もこれにならった。医師が、静脈の浮き出た手を差しのべ、死者の顔にかけられた、白布を取りのぞいた。
大きな死顔だった。
やや角張った、頬骨の張りのある顔は、全く血の気が失せ、部厚い唇は、灰色となり、はれぼったい瞼は、細く開いていて、障子越しの陽ざしに、無気味な光りを放っていた。
医師が、後ろに控えるかねをかえりみた。
「お召ものを、脱がせて下さい」
医師のかすれた声に、かねがにじり寄り、掛布団を、折りたたんだ。生ぐさい血臭が、辺りにただよった。
敷布に、おびただしい血痕が附着し、参議の着ている絹ものの丹前や、一重の木綿の下着も、紫がかった血の液に浸したように、色濃く染っていた。
衣類が、脱がされた。
六尺有余の、頑丈な裸形が現われた。医師は、傷の一つ一つを、些細に点検した。咽喉部に、三ヵ所の刀の突傷があった。二ヵ所は、突きそれ、皮膚に切傷を与えただけだったが、一ヵ所は、喉ぼとけの下部を突き刺し、後ろの襟首まで、突き抜けていた。
額から、右頬にかけて、切傷が一ヵ所。左頬に、かすり傷が一つ。右肩から胸元にかけて、斜めの切傷があった。その他、手の甲、二の腕、脇腹、太股など、合計十三ヵ所の切傷があった。
千馬は、中腰になって、医師の点検を見守り、白紙と矢立を出して、切創の部位を、書き取った。手先がふるえ、いつものような、達筆とはならず、しきりに喉が乾いた。
大井が、室内を見廻わした。
廊下に面した源氏障子に、一尺くらいの血しぶきが、赤い斜線をえがき、その下辺に、指で突いたほどの穴が、開いていた。畳のところどころに、泥の足型が附着し、廊下際の敷居までつづいている。死体の左手に、六双の金屏風が立てられ、足もとの下手には、衣桁が置かれ、つむぎの羽織と着物、総しぼりの帯が掛けてある。
千馬は、大井にうながされ、室内の見取図を、白紙に書きとり、泥の足跡の位置を、うつしとった。千馬は、足跡の一つに、自分の足袋と、寸分もちがいがなかった。
千馬は、見取図を書きながら、廊下に出た。石をあしらった庭は、冬枯で沈んでいたが、くつぬぎ石から、大きな泉水まで、小松やさつきをあしらい、その間を、稲妻形に、とび石がつづいている。
泉水の対岸に、築山がみえ、雪見燈籠を中心に、枝ぶり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com